

オランダのピューリタンⅢ

田 江 安 廣

(1999年10月5日 受理)

Puritans in the Netherlands III

Yasuhiro TAE

V ピルグリム・プレス

目立たぬ職業に従事していたピルグリムたちだったがそのなかで注目すべき活動はトマス・ブルアー Thomas Brewer, ウィリアム・ブルースター William Brewster, エドワード・ウィンズロー Edward Winslowらによる出版活動である。ブルースターはノッティンガムシアのスクルービーに生れた。1580年ケンブリッジ大学に入学するが卒業することはなかった。1584年英国大使ウィリアム・デイヴスン William Davesonにしたがってオランダに渡航, ライデンも訪れた。1587年までデイヴスンに仕えた後, スクルービーに戻り, 父の後をついで郵便局長となる。スクルービーでは熱心な分離派のメンバーとなり, 数度の失敗を経て, アムステルダム, 次いでライデンに移住, ライデンでピルグリム・プレス(アーバーが初めて用いた。ここでもそれを踏襲する)をブルワーと創設する。ブルースターは学生に英語を教えたが彼の教授法はオランダにおける初期の英語教授法のモデルとなった。¹

ブルースターより16歳年下のブルワーはロビンソンと同じく, ライデン大学の学生名簿に名を連ね, ライデンに居を構えた。英国のケントに戻ったとき, ライデンでの影響から「完全なブラウン主義者」として14年間, 牢に入れられたが, ライデン滞在中はブラウニストではなかった。彼はブルースターと協力し1617/1618に Stinksteeg (現在の William Brewsteeg) に印刷所を開き, 多くの“hot”な本を出版した。そのなかでも最も有名なエピソードが, ある本の出版による彼の逮捕, 英国送還である。²

問題の書物は *Perth Assembly* と呼ばれるジェイムズ1世と司祭たち批判の書である。1560年スコットランドでは彼らの長老派教会を創設していたが, 王はこれを弾圧した。1618年パースで催される会議での激しい抵抗を予測して彼らの指導者デイヴィッド・コールドーウッド David Calderwood を捕えようとして, 果たさなかった。彼の原稿は密かにライデンに持ち込まれ, ブルースターらによって印刷された。印刷された本はフランス・ワインの箱に詰められ, スコットランドに持ち込まれて, 密かに配布された。そして1619年1冊の本を当局が知るところとなったのである。嫌疑はエジンバラの印刷工キャスキンにかけられ, 彼は逮捕されて, 投獄される。怒った王自身が取り調べに

加わり自白させようとしたが果たせなかった。そのうち、より興味をそそる知らせが全く予期せぬ所から入ってくる。

ハーグに滞在していた英国大使はこの出来事は知らぬまま、*Perth Assembly*なる書物を手に入れたと報告した。大使カールトンは見たところ、この本は多くの本がそうであるように、ここ〔オランダ〕で印刷され英国に持ち込まれているブラウニストの手になるものと書いてきた。さらに別の手紙でこれはライデンに居住するウィリアム・ブルースターの仕業だと断定し、「悪党」はすでにロンドンに姿をくらませたと報じた。事実はスコットランドで騒ぎが起こって以来、ブルースターは3カ月前に行方をくらませていたのである。

王の命で探索が始まったがブルースターは巧みに居場所を変え、官憲を翻弄した。怒った王はオランダ側に圧力をかけてブルースターを捕えるように命じた。3週間後、大使は誇らしげにブルースターとブルワーを捕えたと報告してきたが、彼が捕えたのは別人だった。今や、ブルースターに対する怒りはブルワーに向けられ、彼はライデン大学の牢に入れられる。王はより詳しい取り調べを求めて、ブルワーを本国へ送還するように命じたが、彼がライデン大学の学生であったことから大学当局はこれを拒絶した。しかしポリアンダー *Johannes Polyander* は3カ月後に釈放されるという確証を条件にブルワーの出頭を説得した。ロビンソン、その他の一行がロッテルダムまでブルワーを送り、そこで英国側に身柄を引き渡した。ロンドンでは数週間に渡って厳しい取り調べがつけられたがブルワーは「王と同じくらいしぶとかった」。2カ月に渡る実りの無い取り調べの後、彼は釈放された。彼がライデンに戻りブルースターと連絡を取ることを当局は期待したが、この罠を察知したブルアーは3年間英国に留まった。

ブルースターが捕えられていれば死刑に処せられていただろうことは容易に想像出来る。アングリカン教会をその著書で批判したレイトン *A. Leighton* は、その立場がブルースターほど過激でないにもかかわらず、罰金を課せられ、耳を削がれ、鞭打たれ、額に焼印を押され、再びもう片方の耳を削がれた後、生涯、牢に閉じ込められたからである。我々の前に再びブルースターが姿をあらわすのはメイフラワー乗船のときである。それもマスター・ウィリアムスン *Master Williamson* という偽名を使って。

ピルグレム・プレスが出版した本の数には上記の *Perth Assembly* を含めて、アーバーによれば15冊、デクスターの調査では16冊であるが、*Breuglemans* の著書によれば20冊前後である。³ その特定を困難にしているのは出版された本が禁書のものがほとんどだからである。当局の目をくらすために様々な戦略が用いられた。たとえば印刷所が分からないように、ありふれた活字を用いたり、偽りの出版地、地名を表紙につけたりする方法が取られた。実際にはアムステルダムやロッテルダムで出版されたものをロンドンで出版されたように見せかけ、また逆に、英国で出版されたものをオランダで出版されたように見せたのである。英国の非国教徒の印刷は常に危険にさらされていた。17世紀のオランダにおける出版部数は世界の半数、あるいはそれを上回っていた。英国の聖書の四分の一はオランダで出版されたという推測もある。⁴

スランガー Keith Sprungerはピルグリム・プレスで出版された書物を四つのグループに分類する。⁵ まずウィリアム・エイムス William Amesの著書を含む初期ピューリタンの著書7冊。次にジョン・ドッド John Dodらの手になる著書。これは禁書でなく分離派、非分離派を問わず好評であったが、ブルースターも採算を考慮しなければならなかったのである（ついでながらドッドの息子ティモシーは1620年31歳でライデン大学の神学専攻に6月20に登録している）。第三のグループはライデンで初めて出版されたオーソドクスなピューリタンの著作でトマス・カートライト Thomas Cartwrightの著書2冊、そのうち1冊にはブルースターの名前とライデン大学のポリアンダーの序がついている。第四のグループに属するものが1618-1619に出版された、より「党派的」な出版物である。このグループにコールドウツの *Perth Assembly* が含まれている。この書はスコットランドの義憤によって生み出されたものであるがピューリタンを喜ばせるほど十分に“anti-prelatical”であった。ピルグレム・プレスの出版の傾向は総じてピューリタン全般に関するものからより過激なものに移っていた。

ピューリタンはなにより言葉の使徒であり、その言葉は神であった。印刷は単なる発明でなく宗教的な信仰の行為であり、宗教上の真理のために存在した。プロテスタンティズムが印刷と手を携えて発展したことを考えたときピルグレム・プレスの果たした役割を無視することはできない。⁶

VI 出 発

11年をライデンで過ごした一行は英国を經由して新世界へ出発する決意を固める。彼らにこの決断を促した原因は何であったろうか。ブラッドフォードは移住の決定がうわついた、あるいは思いつきによるものでなくそれなりの理由“sundry and weighty reasons”（pp.23-25）があることを強調し、主な理由を四つ挙げている。

- 1 ライデン、オランダでの生活の苦しさ、労働の過酷さ。このような苦しみを味わうくらいなら、オランダでの自由より英国の牢がましというものも現れるほどであったこと。
- 2 若い頃には体力もあり生活苦にも朗らかに耐えることもできたが、老いがしのびよっていた。生活の苦しさは彼らの老いを早め、その重みでちりじりになるか、おしつぶされてしまうか、あるいはその両方の可能性があったこと。
- 3 気立ての優しい子供たちも、幼い頃からくびきの下で苦しみ、親の負担をすすんで担おうとしたが、その重みで押しつぶされ、芽吹くことなく生命力を奪い去られていたこと。さらに悲しむべきは「この国の若者の放縦さと誘惑」“the great licentiousness of youth in that country and manifold temptations”（p.25）によって多くの子供たちが誤った途に引き込まれていたこと。あるものは兵士となり、あるものは船で外国に去ったこと。
- 4 新世界に神の福音を伝える希望と熱意を持っていたこと。

ウィンズローもまた移住の理由を6つ挙げている。⁷

- 1 生活の苦しさ。
- 2 英国に帰らざるを得ないほど資産を使わざるをえなかったこと。
- 3 国の保護なしで暮らすことのつらさ。
- 4 英国人としての名前と言語を喪失しかかっていたこと。
- 5 オランダ人によい影響を与えられなかったこと。
- 6 自分たちが受けた教育を子供たちに与えられないこと。

ブラッドフォードとウィンズローの挙げた理由を総合すると、中でもっとも大きな理由と考えられるのは英国人としてのアイデンティティの喪失に対する恐れである。オランダの「メルティング・ポット」に飲み込まれる可能性は異文化の影響をまともに受ける子供たちに顕著に現れていた。オランダ人はピューリタンのように安息日の習慣を厳格に守らなかった。礼拝のあとは食べたり、遊びに興じるのが通常であり、これが禁欲的な彼らの目には不快に映ったのである。サイモン・スキヤマはオランダの子供たちが甘やかされていることを発見した旅行者の驚きと当惑に言及し、阿姆斯特ダムやライデンのピルグリムには“too much kissing” “too much cuddling”と感じられたと述べている。就寝前の子供にお休みのキスをすることも厳しいカルブアニストには“revolting habit”と映じたのである。⁸ピルグリムのあいだでは親が食事中は子供たちは立って給仕するのが習慣だった。

ブラッドフォードは「これらの理由とその他の理由から」移住を決意したと述べているがその他の理由にあたるものをさらに3つ挙げる事が出来る。

- 1 アントワープの休戦が1621年で期限切れになること。
- 2 1619年、全国会議から分離派の集会の禁止、集会での約束事、取り決め、契約等の禁止のおふれがでたこと。
- 3 ピルグリムの一人、ジェイムズ・チルトンと娘に対する投石事件。これを記録（英訳）から引用する。

008 reg. / ONA 180 fo. 239 / April 30, State of Facts ⁹

Parties : James Chilton, Leyden Langbrug Engeltgen Chilton, daughter of James Chilton, Leiden

Statement made at the home of Jacob Hey, town surgeon in Leiden, at the request of the Leyden Remonstrant Brotheren concerning an outbreak of rioting involving some youngsterson Sunday April 28, 1619. In a courtyard at the Langebrug the boys, about twenty in all, had shouted slogans directed at Arminians believed to be meeting there. A heavy stone thrown by one of the rioters had

hit James Chilton's head and injured the latter so seriously that he had to go to Jacob Hey for treatment.

Witnesses : Jacob Hey, town surgeon Jan Sebastiaensz, ruby-cutter

これは1619年4月28日の月曜日63歳のピルグリム、ジェイムズ・チルトン James Chilton と娘が20名ほどの少年達に取り囲まれ、皮肉にも「アルミニウス主義者」と罵られ、頭部に投石を受けて負傷し、娘もひどく傷を受け、医師の治療を要した事件であるがこの投石事件もピルグリムのライデンを去る遠因になったと考えられている。¹⁰

このようにしてピルグリムはオランダを去る決意を固めた。ウィンズローが示したように本国に戻るものもいたが多くが移住を考えた。あるものはギアナ（当時はオリノコとアマゾンの間地帯を指していた）やその他の熱帯地方を土地の肥沃さ、衣料の面から推したが熱帯地方では恐ろしい病が流行し、彼らの身体が気候に適應できず、たとえ植民に成功してもスペイン人が後を追ってきて土地を奪われるであろうと反対された。ヴァージニアにという意見もあったがすでに植民している英国人との間にもめ事が生じ、本国と同じように信教の自由は得られないだろうという反対意見が出された。しかし彼らが達した結論はヴァージニアに全く別の集団として住むということだった。そこで彼らは許可状を得るため、2名をロンドンに派遣した。例によってことはなかなかうまく運ばなかったが、得られた情報をもとにピューリタンのシンパ、ロバート・ノートンをして王に接近させジェイムズ王から好意的な返事を得ることに成功した。王とノートンの会話は有名である。ジェイムズが一行はアメリカで何によって生計を立てるのかを問うと、ノートンは「漁によってでございます」と答えると王は「正直な商売だ。イエスの弟子たちの商売だった」と答えたという。以下、曲折があるがロバート・クシュマン Robert Cushman を英国に派遣して渡航の手筈を整えさせ、やがてメイフラワーが英国でチャーターされる。一方ライデンのピルグリムたちは60トンのスピードウエル号を購入する。150名のピルグリムのうち78名がスピードウエルで英国に向かうことになる。一行は1620年7月20日ライデンで別れの宴を催し、翌日デルフスハーフェンからメイフラワーの待つサウザンプトンへ向けて出港する。出発時の様子はブラドフォードによって生き生きと描かれている。

彼らがそこ [デルフスハーフェン] に到着すると、船と全ての準備が整っていた。彼らと行動を共にできない友人達と船出する人に別れを告げるためにアムステルダムからやってきた人たちもいた。その夜はほとんど眠ることなくキリスト者らしい真の愛と語らいのうちに過ごされた。翌朝、彼らは乗船したが痛ましいのは悲しい、つらい別れの光景であり、ため息とすすり泣きと祈りがこだまし、すべての者の目から涙が溢れ出て、言葉は胸を貫いた。港からその様子を眺め

ていた見ず知らずのオランダ人も涙をこらえることが出来なかった。(中略) こうして互いに抱き合い、涙を流しながら彼らは互いに別れを告げた。これが今生の別れになるものも多くいたのである。(pp.47-48)

一行はこうして「美しい、心地よい12年にわたって彼らの休息の場であったライデンを去った。しかし彼らは自らがピルグリムであることを知っていた。そしてこれらのことには目を向けず彼らの愛する天国に目を向けて、心を静めた。」(p.40) 一行のピルグリムという名はこの一節に由来する。

サウザンプトンから出発した一行であったがスピードウエルは水漏れをおこし彼らはダートマスへひきかえす。そこで修理に多大な時間と課金を費やし再び新大陸に向けて出発したが船は再度水漏れを起こしメイフラワーもスピードウエルもプリマスへひき帰さざるを得なかった。再度スピードウエルは点検されたが特に悪い箇所見当たらず、結局船全体に問題があると判断し、メイフラワーだけで新大陸に向かうことになった。こうして Speedwell は、「名が見事に体を裏切って」航海の役に足つことはなかった。後にこの船のマストが大きすぎ過重な重みが船全体にかかっていたことが航海を困難にしていたことが判明した。これは新大陸に一年間留まることを嫌った船長と船乗り達の企みだといわれる。ピルグリムはよくよく運に恵まれない人たちだった。こうして1620年7月22日ライデンからサウザンプトンに向かった一行が実際に新大陸に向けてプリマスから出発出来たのは9月6日(旧暦)であった。しかもスピードウエルをあきらめざるを得なかったことから全員はメイフラワーに乗船出来ずクシュマンとその家族をはじめ18から20名が英国に留まらざるを得なかったのである。ピルグリム一行が新大陸に到着後、最初の冬に半数が死亡したのは出発の遅れによってニュー・イングランドの冬に十分に備えることが出来なかったこともその一因であった。航海に伴う苦しみ、以後の新大陸での彼らの苦闘は知られているとおりである。

メイフラワーは当時ありふれた船名で建造からおよそ20年を経過していたがワインの運搬に使用されていたことから樽からもれたワインのビルジがゴミを中和し、そのため長い航海にかかわらず1人の死者しか出さなかったと考えられている。¹¹

メイフラワーの意味するところは正確には分からない。谷間の百合、キバナノクリンザクラ cowslip, チューダー・ローズというものもある。しかし今日ではさんざしを指すと考えられている。英国の田舎ではさんざしを今日でも“may blossom”と呼ぶとギル Crispin Gill は指摘している。¹² 1918年以來、この花はマサチューセッツの州花である。

ピルグリムの話は詩のテーマとなるだろう。その詩のためにこの書は既存となるものだとアーバーは1897年に自ら編んだピルグリムについての書で述べた。¹² ピルグリムの書には劇的要素が含まれているからである。事実、アメリカに生まれ、最後にはピルグリムと逆に英国で生涯を閉じた詩人シルヴィア・プラス Sylvia Plath の作品に「メイフラワー」と題された詩がある。¹³ ピルグリムの上陸したコッド岬近くに住んだこともあるプラスにとってはピルグリム・ファーザーズの話は彼女の詩

心を刺激する必然的なテーマだったのであろう。詩人の想像力はメイフラワーの名の由来を、ピルグリムたちをどうとらえているだろうか。その一部分を引用する。

So when staunch stock chose forfeiture
Of the homeland hearth to plough their pilgrim way
Across Atlantic furrows, dark and unsure—Remembering the white, triumphant spray
On hawthorn boughs, with goodwill to endure
They named their ship after the Flower of May.³⁶

ギル氏の指摘どおりメイフラワーという船名はここではさんざしからとられたと詩人は想像する。木とつながる赤と緑のカラー・イメジャリーは勇気と生命力を象徴し、木の根は英国の先祖を、航行する船の残す軌跡は苦勞をともなって耕される大地のイメージと重なって描きだされる。暗い、定かならぬ未来に向けて航行する彼らが思いおこしたのは寒さに強いさんざしだった。寒さに強いさんざしに逆境におかれたみずからを重ね合わせ、「耐えなんという決意」のもとに彼らはその船をメイフラワーと命名したと詩人は想像するのである。

詩人のとらえたピルグリムは苦境に置かれたときほどヒロイクになり、迫害が強まるほど信仰は燃えたぎり、決意はいっそう堅固になった人々を想起させる。ピルグリムのオランダにおける生活は多元社会のなかでわずかな影響力にとどまったが、大西洋を渡り、アメリカの荒野に挑んだときピルグリムが心にかべたのは彼らが最後にすごした文明地プリマスだったろうか、それとも11年を過ごした「美しく、美しいライデン」だったろうか。いかなる苦境の時も彼らには「神のみ国」への絶対的確信があるにしても。

注

- 1 Keith Sprunger, *Dutch Puritanism* (Leiden: E. J. Brill, 1982), p.326.
- 2 G. F. Willison, *Saints and Starngers* (Orleans: Parnassus Imprints Inc., 1971), 初版は1945年。以下ウィルソンによる。
- 3 R. Breugelmans ed., *The Pilgrim Press* (Nieuwkoop: De Graaf Publishers, 1987), p.31.
Arber, p.237 ff. H. M. Dexter and M. Dexter, *The England and the Holland of the Pilgrims* (Boston and New York: Houghton Mifflin & Co., 1905), pp.605-606.
- 4 Keith Sprunger, *Trumpets from the Tower: English Puritan Printing in the Netherlands 1600-1640* (Leiden: E. J. Brill, 1994), pp.29-30.
- 5 Keith Sprunger, "The Godly Ministry of Printing by Brewster and Brewer" in Breugelmans ed., pp.172-176.
- 6 Sprunger, *Trumpets from the Tower*, p. 1.
- 7 Edward Arber, *The Stories of the Pilgrim Fathers, 1606-1623, As told by Themselves, their Friends, and their Enemies* (Boston: Houghton Mifflin & Co., 1897), p.263.

- 8 Simon Schama, *The Embarassment of Riches* (London : Fontana Press, 1991), p.485.
- 9 インターネットでライデンの Gemeente-archief より得た資料。
- 10 Jan van Dorsten, "Why the Pilgrim Left Leiden" in Jeremy Bangs ed., *The Pilgrims in the Netherlands : Recent Research* (Leiden : The Sir Thomas Institute and the Leiden Pilgrim Document Center, 1984) および J. W. Tammel ed., *The Pilgrims and Other People from the British Isles in Leiden 1576-1640* (Isle of Man : the Mansk-Svenska Publishing Co. Ltd., 1989), p. 6 参照。
- 11 Bradford, p.52. n. 1 .
- 12 Crispin Gill, *Mayflower Remebered* (New York : Taplinger Publishing Co., 1984), p.60.
- 13 Sylvia Plath, *The Collected Poems* (New York : Harper & Row Publishers 1960), p.60.